

中国における風力発電政策の基礎研究：風力発電の発展と困難に関する社会学的考察

高, 瑜 / GAO, Yu

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

227

(発行年 / Year)

2015-03-24

(学位授与番号 / Degree Number)

32675甲第351号

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2015-03-24

(学位名 / Degree Name)

博士(政策科学)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00011752>

博士学位論文
論文内容の要旨および審査結果の要旨

氏名	高 瑜
学位の種類	博士（政策科学）
学位記番号	第 567 号
学位授与の日付	2015 年 3 月 24 日
学位授与の要件	本学学位規則第 5 条第 1 項(1)該当者(甲)
論文審査委員	主査 教授 池田 寛二 副査 教授 島本 美保子 副査 名古屋大学准教授 丸山 康司

中国における風力発電政策の基礎研究
—風力発電の発展と困難に関する社会学的考察—

I. 論文内容の要旨

1. 本論文の目的と意義

高瑜氏は、中国政府派遣留学生として 2010 年 4 月に法政大学大学院政策科学研究科政策科学専攻博士後期課程に入学し、鋭意研究に取り組み、2014 年 3 月に博士学位請求論文『中国における風力発電政策の基礎研究—風力発電の発展と困難に関する社会学的考察—』（以下、本論文と呼ぶ）を提出した。

本論文は、A 4 版ワープロ横組みで 1 頁 40 文字 36 行（1240 字）のフォーマットで書かれており、論文要旨 4 頁、目次 7 頁、本文 211 頁、文献リスト 8 頁、謝辞 2 頁、合計 232 頁から成る。

（本論文の目的）

近年の中国における風力発電の発展はめざましい実績を示し、発電総容量においても送電網への接続総容量においても現在世界第一位となっている。だが、このような発展の持続可能性を高めるには、多くの困難が立ちはだかっている。本論文は、それらを「4つの代表的困難」、すなわち、「制御できない発展速度」「消費の困難」「接続の困難」「送電網の遮断」に集約できるという前提に立って、主に社会学的視点から、中国における風力発電の発展の過程で生じているそれらの困難の実態とその背景にある社会的特質を把握するこ

とを最大の目的とするものである。その目的を達成するために、本論文では、風力発電政策、電力管理体制、社会体制という3つの水準において、風力発電発展の4つの代表的困難の社会的要因を解明し、それらの困難を克服し得る今後の風力発電発展政策の方向性を検討している。

(本論文の意義)

本論文がいかなる意義を有するかについて、学術的意義と実践的意義に大別して指摘しておく。まず、本論文の学術的意義は、中国の風力発電が世界一の実績を示しているにもかかわらず、それを実現してきた政策に関する先行研究が世界的に見ても極めて少ない現状において、本論文はパイオニア的な学術的貢献を果たしているという点にある。しかも、数少ない先行研究もそのほとんどはマクロデータに示された政策の成否に焦点を当てて分析する研究が主流で、政策の背景にある社会的要因にまで目を向けた研究は稀であった。しかも、そのために社会学の視点から中国の風力発電の発展過程とその問題点を明らかにした研究は皆無に近く、その意味でも、本論文は中国および世界の風力発電発展政策研究に対して大きな学術的意義を有すると評価できる。

一方、本論文の実践的意義は、中国の風力発電政策の現場に踏み込んで実証的な調査を実施し、その成果を踏まえて政策研究を行っている点にある。文献や行政資料の分析のみにとどまらず、北京を中心に、行政、企業、研究機関、NGOなど多方面の専門家から詳細なヒヤリング調査を実施したばかりでなく、河北省、内蒙古自治区など風力発電の現場においてもインテンシブな参与観察やインタビューを精力的に実施し、それらによって得られた質的データの分析に依拠して政策研究を展開している点に、本論文の実証的価値を見出すことができる。そのような実証研究に裏付けられていることが、本論文の説得力と政策に対する実践的意義を高めていると評価できる。

2. 本論文の構成と内容

(本論文の構成)

本論文は以下に示す目次のとおり、全体が3部に分かれていて、序章と結論を除いて全8章で構成されている。第Ⅰ部は、本論文の問題意識、社会的背景、理論的視点、先行研究との関係が論じられている(1-2章)。第Ⅱ部では、風力発電の4つの代表的困難の実態を実証的に解明し、その社会的特質を検討している(3-6章)。最後に第Ⅲ部で、風力発電の発展と困難をめぐる理論的考察を行い、論文全体の結論とそれにもとづく政策的インプリケーションの検討を試みて締め括っている(7-8章)。

序章

1 問題の所在 1

2 本論の構成 2

3 調査の概要 5

第 I 部 問題意識の背景と歴史的回顧

第 1 章 風力発電の発展問題についての社会学研究——問題関心と視点の提示 6

- 1 中国における風力発電の発展実情の概観 6
 - 1.1 風力発電の発展の実績 6
 - 1.2 風力発電の発展の困難 6
- 2 風力発電の技術的特色と研究課題の設定 8
 - 2.1 技術的長所 8
 - 2.2 技術的難点 11
 - 2.3 課題としての「難点の克服」 16
 - 2.4 研究課題の設定 17
- 3 風力発電の発展問題に対する先行研究の問題点 17
 - 3.1 実績の重視と困難の軽視 17
 - 3.2 発展の困難に対する電力管理体制からの影響を見過 18
 - 3.3 政策作用の有効な発揮に対する社会体制からの制約を看過 20
 - 3.4 風力発電の発展問題に対する社会学の研究の空白 20
- 4 風力発電政策と電力体制と社会条件からの「複合影響」の概観 21
 - 4.1 風力発電の発展に影響する諸要素の種類 21
 - 4.2 発展段階及び発展政策の概要 22
 - 4.3 発展の4つの代表的困難に対する「風力発電政策」からの影響 23
 - 4.4 発展の4つの代表的困難に対する「電力管理体制」からの影響 25
 - 4.5 発展の4つの代表的困難に対する「社会的条件」からの影響 27
- 5 「風力発電の発展問題」についての理論的視点を展開する可能性 31
 - 5.1 「風力発電の発展問題」の性格の位置づけ：総合的社会問題 31
 - 5.2 風力発電の発展において「中範囲の理論」及びこの示唆 31
 - 5.3 「社会的メカニズム」論の示唆及びこの応用 33
 - 5.4 主体の行為を把握する「戦略分析」及びこの実証応用 35
 - 5.5 社会・技術システム論及びこの示唆 37

第 2 章 中国における風力発電の発展史——政策推進に関する社会史 38

- 1 初期の発展段階における実情と特徴(1986-2002) 38
 - 1.1 モデルの導入段階 (1986-1993) 38
 - 1.2 産業化の確立段階 (1994-2002) 39
- 2 急速な発展の段階における実情と特徴(2003-2014) 42

2.1	競争入札と速い発展——「巧遅」段階（2003—2007）	42
2.2	風力発電基地が齎した急速な発展——「拙速」段階（2008—2014）	45
3	発展の実績を上げる要因——政策推進の発展史	48
3.1	風力発電の発展過程と風力発電政策の「成長」	48
3.2	風力発電機の製造の国産化に関する政策の推進力	48
3.3	風力発電の価格政策に関する推進力	51
3.4	国の財政補助による支援に関する政策の推進力	53
	まとめ	54

第Ⅱ部 風力発電の発展に伴う4つの代表的困難——4つの事例の研究

第3章	制御できない発展「速度」——「拙速」と「巧遅」の闘い	55
1	制御できない発展「速度」の実情	55
1.1	間断なく拡大された風力発電基地計画	55
1.2	「大躍進」発展の実情	57
1.3	制御できていない発展「速度」を研究する必要性	59
2	制御できない発展「速度」の本質的特徴——4つの問題群の「構造的対立」	60
2.1	「三北」地域の急速な開発と他の地域の開発の後進性	60
2.2	集中型開発の速さと分散型開発の遅さ	61
2.3	「ハード」建設と「ソフト」建設の不均衡	62
2.4	調整電源の遅い建設と風力発電所の速い建設	63
3	制御できない発展速度とほかの三つの代表的困難	64
3.1	開発地域の「不均衡」がもたらした負の結果	64
3.2	開発類型の「不均衡」がもたらした負の結果	65
3.3	「ハード」建設と「ソフト」建設の不均衡がもたらした負の結果	66
3.4	調整電源・風力発電所の建設の「不均衡」がもたらした負の結果	67
3.5	制御できない発展速度とほかの三つの代表的困難	68
4	制御できない発展「速度」と政策的影響	69
4.1	審査権限の移管政策と発展「速度」に対する制御の終息（2005—2011）	69
4.2	審査権限の撤回政策と発展「速度」の短期間の調整（2012—2013）	70
4.3	審査権限の再移管と発展「速度」の変化（2014）	71
5	「拙速」発展から「健全な発展」までの可能性	72
5.1	世論の圧力：社会から良質な発展へのアピール	72
5.2	社会背景：国家戦略の要求	73
5.3	政府の行為の変化：態度の変化と措置の追加	73
5.4	「技術的難点」を改善する需要：発展速度と「技術的難点」の関係	75
	まとめ	77

第4章	風力発電の「消費の困難」——地元消費と外部消費の両方の困難	78
1	風力発電の「消費の困難」の加速・深刻・調整	78
1.1	「消費の困難」に関する実態	78
1.2	風力発電の盲目的な拡張と「消費の困難」との対応関係	81
1.3	風力発電の「消費の困難」を研究する必要性	82
2	風力発電の「消費の困難」に関する本質的特徴	83
2.1	どのような「入口」から風力発電の「消費の困難」に関する本質の研究に着眼するか	84
2.2	諸省における風力発電の生産・消費の矛盾の相違——一地域一特徴	85
2.3	「三北」地域における風力発電の生産・消費の矛盾——特色地域の「重点問題」	87
2.4	全国における風力発電の生産・消費の矛盾——「三北」地域と「三華」地域	89
2.5	全国的範囲における風力発電の需給の均衡を如何に実現するか	90
3	風力発電の「消費の困難」の要因と政策的影響	91
3.1	送電網の建設計画の遅れ	91
3.2	調整電源の建設計画の遅れ	93
3.3	風力発電の立地計画の非合理	94
3.4	関連政策の執行失敗がもたらした「連鎖的反応」	97
4	風力発電の「消費の困難」を改善する可能性	99
4.1	国家送電網会社の努力	99
4.2	政府の行政力	103
4.3	大気汚染を制御する圧力	105
4.4	風力発電の「技術的難点」に対して改善の推進力	107
	まとめ	108
第5章	風力発電の「接続の困難」——物理的困難から、技術的困難まで	109
1	風力発電の「接続の困難」の発生・拡大・調整	109
1.1	風力発電の「接続の困難」に関する分類	109
1.2	風力発電の「接続の困難」に関する実情	109
1.3	風力発電の「接続の困難」を研究する必要性	113
2	風力発電の「接続の困難」に関する本質	
	——風力発電システムの未形成の三種類の統合	114
2.1	どのような研究の「入口」から「接続の困難」の本質的研究に着眼するか	114
2.2	送電網の建設が風力発電所の建設に遅れた「物理的接続の困難」	116
2.3	風力発電の消費の困難がもたらした「機能的接続と物理的接続との複合型困難」	

2.4	LVRT 技術の検査と改造の後進がもたらした「技術的接続の困難」	118
2.5	風力発電の「接続の困難」の改善の方策を如何に考えるか	119
3	風力発電の「接続の困難」の要因と政策的影響	119
3.1	「消費の困難」を改善する政策の不利——機能的接続の困難	119
3.2	関連技術の標準の制定の後れ——技術的接続の困難	121
3.3	政策の欠点もたらした「連鎖的反応」——物理的接続の困難	122
4	風力発電の「接続の困難」を改善する可能性	124
4.1	国家送電網会社の努力	124
4.2	政府の行政力	125
4.3	風力発電の「技術的難点」に対して改善の推進力	127
	まとめ	128
第6章	送電網の大規模な遮断の事故 —— 「技術」と「社会的な技術」の区別	129
1	全国における送電網の遮断事故の実情	129
1.1	全国における送電網遮断事故の頻繁な発生	129
1.2	事故防止の対策及び効果	130
2	酒泉風力発電基地の送電網遮断事故——最も深刻な事故	132
2.1	優利な自然的条件—好条件の地理と豊富な風力資源と広い土地面積	132
2.2	巨大な開発計画と急速な推進情況	133
2.3	開発の急速な推進が齎した送電網遮断事故	136
2.4	送電網遮断事故に対する関連組織主体の対処過程—政府主体と事業主体	137
3	関連組織の弱い技術システムと風力発電の送電網の遮断事故 ——社会-技術システム論の視点から	138
3.1	社会-技術システム論からの示唆	138
3.2	送電網遮断事故を引き起こした直接的原因 ——関連組織の弱い技術システム	141
3.3	送電網遮断事故を解決する直接的対策 ——関連組織の技術システムの改善	142
4	送電網遮断事故の背後にある社会的原因 — 「社会的な技術」と「技術」の区別の視点から	144
4.1	社会-技術システム論の限界と欠点	144
4.2	「技術」と「社会的な技術」の概念を区別する学問的意義と実践的意義	145
4.3	社会的な技術と送電網遮断事故の社会的原因	146
5	送電網の遮断事故を防止する可能性	147
5.1	技術システムの改善の程度	147

5.2 政策の作用と関連組織の連携作動 148

まとめ 151

第Ⅲ部 理論的分析と政策提言の準備

第7章 中国における風力発電の発展の困難と電力管理体制の欠陥

——風力発電の発展の三つの代表的困難を事例として 152

1 電力体制改革の歩みと現状 152

1.1 電力体制改革の歩み 152

1.2 「中途半端」な電力体制改革の現状 154

2 電力管理体制と複数の事業システムの経営 155

2.1 電力管理体制と風力発電システムの複数の事業システムの経営 155

2.2 電力管理体制の欠陥と風力発電の発展の困難 156

3 電力体制の欠陥は、如何に、風力発電の「消費の困難」をもたらしたか 157

3.1 電力体制の欠陥の与える風力発電の発展への悪影響 157

3.2 関連する法制度の制定において、中国政府が置かれた「構造化された場」 157

3.3 電力管理体制の欠陥が、よい政策の実行を妨げている 158

3.4 風力発電優先購入に対する送電網会社の積極性を妨げる「構造化された場」 160

4 送電網会社の独占的な経営と風力発電の接続の困難 162

4.1 独占された送電網建設と風力発電の「物理的接続の困難」 162

4.2 「LVRT 機能検査」の独占と風力発電の「技術的接続の困難」 163

4.3 独占的な送電事業組織における役割遂行を規定していたミクロ的「利害関心」
164

5 国有風力発電所の独占経営と制御できない発展「速度」 165

5.1 風力発電所に関する多様な経営主体の表面的競争と国有企業の実質的独占 165

5.2 風力発電所において、国有企業の実質的独占がもたらした利点と弊害 166

5.3 制御できない発展「速度」が国有風力発電所によって直接的に推進された社会過程 167

第8章 中国における風力発電の社会的メカニズムに関する理論的研究と実証分析 171

1 風力発電にかかわる社会的メカニズムの概要 171

1.1 当該の社会的メカニズムの定義と特徴 171

1.2 発展実情の分析と研究用具の選択 173

1.3 風力発電にかかわる社会的メカニズムの構造・機能・経営 174

2 風力発電にかかわる社会的メカニズムの構造 175

2.1 風力発電にかかわる社会的メカニズムの主体 175

2.2 風力発電にかかわる社会的メカニズムの客体——主体に支配された社会要素 179

3	当該の社会的メカニズムの構造の変動に影響した力	181
3.1	4種類の「利害関心」の内面化——主体の行為の動機	181
3.2	「学者型」の公務員と「独断型」の官僚との「ゲーム」	184
3.3	「良心型学者」と「官僚型学者」との闘い	185
3.4	「民営企業」と「国有企業」との競争	186
3.5	「利害関心」の分極と「利害調整」の力——主体変動の力	187
4	社会的メカニズムの構造と風力発電の発展の特徴	188
4.1	社会的メカニズムの構造を基盤にして生み出される発展の特徴	188
4.2	国営企業の主力支援を基盤にした国家意志の推進力——国の政治経済の影響力	190
4.3	国家のマクロ的な経済政策との密接なつながり——国の経済政策の影響	192
4.4	政策推進の依存——市場の能力の弱さと政府の過度関与	194
5	風力発電にかかわる社会的メカニズムの機能と風力発電の発展	196
5.1	社会体制による正機能の「合力」と風力発電の実績の獲得	196
5.2	地理資源要素による正機能の「合力」と発展の実績の獲得	197
5.3	個人・組織行為による正機能の「合力」と発展の実績の獲得	197
5.4	諸社会的サブメカニズムによる正機能の「合力」と発展の実績の獲得	197
6	当該社会的メカニズムの経営状況と風力発電の発展の規則	198
6.1	欠陥がある経営現状の二表現	199
6.2	経営システムの理想的状態と改善方向	201
6.3	「取り組みの場」の空洞化による風力発電の発展の困難	202
6.4	電力体制・社会体制の制約と複数の経営システムの統合不足	203
6.5	複数の経営システムの状態と発展の規則性	205
	まとめ	207
	結論	208
	参考文献	212
	謝辞	220

(本論文の内容)

各章では、概略以下のような議論が展開されている。

序章では、中国における風力発電の発展をめぐる問題の所在を指摘し、本論全体の構成と中国での調査研究の概要を紹介している。

第I部第1章では、風力発電の発展をめぐる従来の分析視点から継承すべき視点と限界を検討し、風力発電の発展問題に関する社会学的研究の空白を指摘している。さらに、風力発電の技術的難点及びその克服の障害を検討し、巨大な出力変動の制御問題という風力発電の本質的課題と中国の風力発電の発展にかかわる諸問題とを結びつけて、本研究の課

題を設定している。第2章では、中国の風力発電政策の発展史を、初期における2段階、すなわち、モデルの導入段階（1986-1993）、産業化の確立段階（1994-2002）に分けて整理したうえで、その後の急速な発展段階を、競争入札制度が導入された「巧遅」段階（2003-2007）、風力発電基地の建設が急増した「拙速」段階（2008-2014）に分け、各段階の特徴をまとめている。

第Ⅱ部では、風力発電の4つの代表的困難の実態を実証的に解明し、その背景にある社会的特質を検討している。第3章では、「制御できない発展速度」の実情とその社会的特質を明らかにしている。第4章では、「消費の困難」の実態と社会的背景を検討している。第5章では、「接続の困難」の実情と社会的特質を検討している。第6章では、「送電網の遮断」事故の実態と社会的背景要因を考察している。

第Ⅲ部では、風力発電の発展と困難をめぐる理論的考察を試みている。第7章では、電力体制の問題点を組織社会学における「戦略分析」論の視点から解明し、それらの問題が第Ⅱ部で検討した代表的困難とどのような対応関係にあるかを分析している。第8章では、「中範囲の社会学理論」の立場から、中国における風力発電の社会的メカニズムに関する理論研究と実証研究の対話を試みている。そして最後に、本研究の課題がどの程度達成されたかを確認したうえで今後の課題を提示し、結論としている。

本論文全体の内容を適切に評価するには、それが、表題にも端的に示されているように、パイオニア的な「基礎研究」であるという点に主眼を置く必要がある。すなわち、現在急成長の真っ只中にある中国の風力発電発展政策を学問的に研究するために必要な基礎的な視点や理論枠組みを提示しているという点からまずもって評価されなければならない。そのような観点から見ると、本論文は、中国の風力発電政策の基本的な特質を可不足なく捉えている。風力発電の技術的検討、急成長の歴史的経緯、風力発電政策過程の全体像、政策実施に関与している電力管理体制の特質、それらの背景にある社会的諸条件、それらを分析するために有効な理論枠組み（「中範囲の理論」「社会的メカニズム論」「戦略分析論」「社会・技術システム論」）が漏れなく検討されており、後進の研究者に多くの専門的な研究の課題を提示している。その意味で、中国の風力発電に関する社会学的な「基礎研究」としては十分に評価できる内容を具えている。

しかも、中国の特有の実情も詳細に議論されていて、単なる「基礎研究」にとどまらない専門的に興味深い知見も豊富に示されている。それらは、大きく4点にまとめることができる。一つは、中国の風力発電の急速な発展の「速度」には、開発地域間の不均衡、ハード建設の速さとソフト建設の遅さの不均衡、審査権限を定めた政策の変遷がもたらした不均衡などさまざまな矛盾が内包されていることを明らかにしている。二つ目に、地元の消費能力が不足していて、発電できるにもかかわらず停止せざるを得ない「棄風」という経済的損失が生じている実態と要因を検討している。三つ目は、風力発電所と送電網との未接続率の高さの実態と要因を明らかにしている。四つ目は、仮に送電網に接続されていても、送電網の遮断事故が頻繁に起こっている実情と要因を議論している。これら4つの

論点は、いずれも中国の風力発電の現状と政策的に克服すべき課題を明解に示したものであり、今後の中国の風力発電政策研究に多くの示唆を投げかけている。

II. 審査結果の要旨

1. 審査経過

2014年3月31日に高瑜氏から本論文の提出を受け、大学院政策科学研究科教授会（現在は、大学院公共政策研究科市民社会ガバナンスコース会議）により同年4月5日に設置された学位論文審査小委員会は、同年5月10日に第1回審査小委員会を開催し、その後の書面等によるさまざまな形式の予備的な審査の後、2015年1月16日、全体でほぼ2時間にわたって高瑜氏より学位論文審査小委員会委員に対する口頭説明を一般公開のもとで受け、それを踏まえて試問を行った。その結果、審査小委員会として高瑜氏に博士の学位を授与することが適当であるとの結論に達した。

なお、本論文審査小委員会が設置され第1回審査小委員会が開催された時点では、副査の一人は高瑜氏が政策科学研究科博士後期課程に入学以来論文指導を担当してきた船橋晴俊教授であったが、その後2014年8月に船橋教授が急逝されたため、同年9月に開催された研究科教授会（コース会議）において急遽島本美保子教授に新たに副査を委嘱し、その後の審査を進めてきたことを付言しておく。

2. 評価

本論文は、現代中国において風力発電の発展が急速に展開されている現状を、その成功面、失敗面のいずれか一方に偏らず、政策科学的に極力価値中立的な立場から理論的・実証的に洞察した独創性に富む業績であり、そこに本論文の最大の価値を認めることができる。また、ともすれば技術的もしくは経済合理性の視点から論じられがちな風力発電政策を、社会学的な理論枠組みと実証研究の方法を導入して解明している点にも、学問的な切り込みの斬新さがうかがわれる。その意味で本論文は、社会学というディシプリンにもとづく政策科学の研究成果として高く評価できる。さらに本論文は、中国や日本および世界の一般市民に対しても、社会学の専門家に対しても、エネルギー政策の専門家や研究者に対しても、多くの斬新な視点や知見を提供することができる示唆に富む内容を具えている。いずれにせよ、本論文は、政策科学における実践的価値という観点からしても、社会学における学問的貢献という観点からしても、極めて高く評価できる論文である。

とはいえ、本論文は、表題に示されているように「基礎研究」であり、現代中国の風力発電政策が直面している幾多の課題を個別に掘り下げて解明し尽くしたわけではない。そ

こには、当然のことながら、さらに研究を深めねばならない多くの課題が残されている。

審査小委員会で指摘された課題は大きく四点ある。一つは、中国における風力発電の需給バランスの構造的特性をさらに深く洞察する必要があるという指摘である。中国では、全国的に電力需要は増加し続けている。すなわち、放っておいても電力需要は増えている。したがって、電力需要が急増しない日本や欧米とは異なる需給構造を前提に政策を検討する必要がある。確かに、地域によっては発電量が電力需要を超過し「棄風」を余儀なくされている事例は少なくないが、全国的に見れば需要は増え続けているという中国特有の国家レベルの需給構造の検討を精緻化する中で地域間の需給構造を再検討するべきであろう。

二つ目は、風力発電事業の担い手である企業の実態が必ずしも十分に解明されていない。周知のように、社会主義市場経済体制の下にある中国の企業、とりわけ国営企業の経営実態は、日本も含め多くの国々の企業とは異なる特質を具えている。しかし、少なくとも風力発電産業においては、競争入札や固定価格買取制度など日本や欧米諸国と一見した限りでは大きな相違のない制度が導入されている。それらが、日本や欧米とどれほど共通した特徴を示しているのか、どこにどのような違いがあるのかなど、国際比較の視点を踏まえた考察も今後の課題として残されたと言わざるを得ない。

三つ目は、論文全体の構成に関わる指摘である。本論文では、中国における風力発電発展の「4つの困難」を、あたかも普遍的な前提であるかのように論文全体が構成されている。しかし、論述の手順としては、中国の風力発電政策の歴史的展開と現状分析と先行研究を踏まえて、「4つの困難」が普遍的な政策課題として析出される過程から論を起すべきであった。実際には、主に第Ⅱ部の各章でその過程が断片的に論じられているので、今後本論文を発展させる際には、構成に配慮すべきである。

四つ目に、本論文は、「中範囲の社会学理論」を標榜したとはいえ、社会学的な理論枠組みと実証的な政策研究との間に必ずしも十分な対話が展開されたとは見受けられないのが残念であった。理論は現実を説明するためにのみあるのではなく、むしろ実証的に明らかにされた経験的知見によって理論的な洞察が再構築されるところに「中範囲の社会学理論」の真骨頂がある。その意味で、本論文における理論と実証との往還は不十分であり、そこを補完することも今後の課題とされなければならないだろう。

ただし、以上の指摘はあくまで今後の研究課題を明示するためのものであり、学位論文としての本論文の評価に直接かかわるものではないことも、併せて付記しておく。

3. 結論

以上述べたように、高瑜氏の学位請求論文は、現在進行中の中国の風力発電の急激な発展を社会的条件にまで視野を広げて政策科学的に洞察した先行研究に類例のない挑戦的な試みの成果として学術的な貢献が顕著に認められるものであり、博士号の授与に十分に値

するものと考えられる。

したがって、本論文審査小委員会は、委員全員の一致した意見として、高瑜氏に博士（政策科学）の学位が授与されるべきであるとの結論に達した。